

『百人一首』「難波瀉みじかき葦の」は伊勢歌か

——『伊勢集』構造論からの検討——

妹尾好信

はじめに

藤原定家の撰になる『百人一首』は、古来、王朝和歌の規範として広く愛好されて来た。そこに採られた百首の歌は、それぞれ百人の歌人の代表作として最も人口に膾炙し、時代を超えて親しまれている。

しかしながら、それらの歌が真にその歌人の代表作と言えるかどうかについては、多分に問題があろう。最近では、定家は必ずしも各歌人を代表する名歌を選んだというわけではなく、他に何か別の意図があつてそれらの歌を選んだのではないかというような議論も起こっている。

ただ、定家はおそらく、それぞれの歌がその歌人の詠作であるということにはかなり確信を持っていたことだろうと思う。『百人一首』は、その名の通り、上代から定家と同時代に至る百人の歌人を選び、その歌人の歌を一首ずつ挙げた撰集である。つまり歌人本位の撰集ということになる。だから、それぞれの歌は、まず確実にその歌人の歌だと信じて採歌したことであろうと思われる。これは『百人一首』の前身とも言われる『百人秀歌』に関しても同様であ

る。

ところが、個々の歌を調べてみると、その歌人の詠作であることが疑わしいものがいくつか存在している。たとえば、天智天皇の「秋の田の仮庵の庵の苦をあらみ」の歌や、柿本人麻呂の「あしひきの山鳥の尾の垂り尾しりこの」の歌は、『万葉集』に見える作者未詳歌のバリエーションで、伝誦性の強い古歌が両歌人に仮託されたものと考えられる。また、猿丸大夫の「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の」の歌も、『古今集』では「惟貞のみこの家の歌合の歌」と記す詠み人知らずの歌である。

これら古い時代の歌人の歌だけでなく、平安朝の代表的な歌人の歌の中にも疑わしいものがある。たとえば、中納言兼輔の「みかの原分きて流るる泉川」の歌は、古く契沖が『百人一首改観抄』で疑問を提出しているように、『兼輔集』に見えない歌であり、『古今六帖』では作者名を記さない歌群中に存する。また、大中臣能宣朝臣の「御垣守衛士のたく火の夜は燃え」の歌も同様に『古今六帖』では作者名が記されず、『能宣集』に見えないため、『百首異見』で香川景樹が能宣作を疑っている。かように百首の歌の中にはその歌人の詠作か否か定め難いものが見出されるのである。

そして、実は、『古今集』『後撰集』『拾遺集』と、三代集すべてに女流歌人として最多の歌を採られた大歌人伊勢の「難波渦みじかき葦のふしの間も」の歌についても、伊勢真作かどうかに不安があるのである。しかしながら、近年刊行された『百人一首』の注釈書や解説書の類を見ても、そのことに触れているものが見当たらないので、一般には伊勢作と信じて疑われていないようである。そこで、本稿では、この歌を伊勢詠とするのがどの程度怪しいかということについて論じてみたいと思う。

一

まず、改めて『百人一首』の歌を掲げると、一九番目に、

伊 勢

難波渦短き葦のふしの間も逢はでこの世をすぐしてよとやとあつて、これは『百人秀歌』でも全く異同はない。

この歌は、『新古今集』巻十一・恋歌一に次のように載っている。

題知らず

伊 勢

み熊野の浦よりをちに漕ぐ舟のわれをばよそに隔てつるかな

(一〇四八)

難波渦短き葦のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

(一〇四九)

「み熊野の」の歌と二首並べて入集しているのであるが、この配列について、樋口芳麻呂氏は「遠く隔てられての嘆きの歌となり、巧みな配列といえる」と評されている。ちなみに『新古今集』の撰者名注記を見ると、一〇四八番は定家・家隆・雅経、一〇四九番は有家・定家・家隆・雅経とあり、ともに定家を含む複数の撰者名が

記されている。したがって、当然定家はこの二首の歌を伊勢作と確信して『新古今集』に入集せしめたものと思われるのである。

この「難波渦」の歌は、伊勢の家集にも見えている。『伊勢集』の諸伝本は大きく三系統に分けられるが、この歌はいずれの系統にも存在している。だから、兼輔や能宣の歌のように、家集に見えないために真作を疑われるということはない。

しかしながら、問題は『伊勢集』そのものにあるのである。

『伊勢集』の三系統とは、(一)西本願寺本系統、(二)群書類従本系統、(三)歌仙家集本系統の三つである。『私家集大成』中古一(昭四八明治書院)には、各系統の代表的伝本の本文がそれぞれ「伊勢Ⅰ」「伊勢Ⅱ」「伊勢Ⅲ」として翻刻されている。

周知のごとく、『伊勢集』は、冒頭の三〇首余りが「伊勢日記」とも呼ばれる歌物語的部分であり、そのあと屏風歌が並べられ、さらに雑纂的な家集部分が続いている。そして、三系統それぞれに歌の数や順序に若干の相違はあるが、巻末近くに六十数首の詞書を持たない特異な歌群が存在している。『私家集大成』の番号で言えば、Ⅰの西本願寺本で三七九番から四四三番までの六五首、Ⅱの群書類従本系の伝飛鳥井雅子筆本で三八三番から四四八番までの六六首、Ⅲの歌仙家集本系の正保版本で四二九番から四八五番までの五七首がそれに当たる。三系統つぎ合わせて六六首の歌がこの歌群に含まれることになる。

歌仙家集本系統にのみ、「これもおなじ忍ぶの中なる中がきのうたとて」という、この歌群全体に掛かると思われる意味のあまり明瞭でない前書が付いている。この歌群の歌には、全く詞書を有しないことその他に、歌枕を詠み込んだ恋歌が多いという特徴が見られる

が、それよりも、明らかに伊勢の詠作ではない歌が少なからず含まれていることが最大の特色である。

いわばこの歌群は、伊勢歌ならざる歌を多数含む名所恋歌集成なのである。そして、実は「難波鴻」の歌はこの歌群の中に存している。また、『新古今集』にこの歌と並んで採られている「み熊野の」の歌もやはりこの歌群に見えている。定家はおそらく、二首ともに『伊勢集』のこの歌群から採歌したのであらうと思われる。

二

それでは、この歌群の歌には、実際どの程度伊勢歌ならざる歌が含まれているのかを調査し、次ページからの「表Ⅰ」に示してみたい。六六首の歌に通し番号（マル数字）を付し、歌仙家集本系統の正保版本（『私家集大成』の「伊勢Ⅲ」、略称「仙」）を主底本にして歌番号と初句を示し、これと同系統の代表的な伝本として天理図書館蔵の藤原定家等筆本（略称「天」、宮内庁書陵部蔵のいわゆる「御所本三十六人集」本（略称「御」、内閣文庫蔵の三十六人集中の本（略称「内」）の三本、および他系統の本として群書類従本系統の島田良二氏蔵伝飛鳥井雅子筆本（『私家集大成』の「伊勢Ⅱ」、略称「群」）と西本願寺本系統の西本願寺本（同「伊勢Ⅰ」、略称「西」）の二本を取り上げ、各本における歌の配列を歌番号で対照した。そして、「副文献」として、『新編国歌大観』第一巻から第六巻までに所収されたすべての文献に当たり、この歌群中の各歌と同一歌ないしそのパリエーションと考えられる歌を載せる文献名と歌番号、さらにその文献が記す詠者名をそれぞれ略称を用いて示した。括弧内が詠者名で、「不知」としたのは詠み人知らずとするも

の、「不記」としたのは詠者名を記さないものである。同一歌と決め難い場合は「類歌」と注した。

この副文献一覧を眺めてみると、まず勅撰集では、平安朝に成立した七集のうち、類歌をも含めて、『古今集』に四首、『後撰集』に六首、『拾遺集』に五首、『金葉集』に一首、『詞花集』に一首と、五集に合わせて一七首の歌が撰入されていることがわかるが、これらはすべて伊勢以外の歌人の作か、あるいは詠み人知らずとなっている。この歌群の歌が伊勢作として採られているのは『新古今集』が最初で、全部で一〇首撰入されているうち、伊勢作としているのが②・③・⑤・⑧・⑩・⑫の六首、他人詠ないし詠み人知らずとしているのが④・⑥・⑦・⑨・⑪・⑬の四首である。次の『新勅撰集』では、三首採られているうち、伊勢作とするのが⑭の一首、詠み人知らずとするのが⑮と⑯の二首である。それ以後の勅撰集では、『新千載集』が⑰の歌を『大和物語』等によったとおぼしく宗于の歌としている他は、いずれも伊勢作として採られている。

すなわち、『新古今集』より前の七勅撰集においては、この歌群中の歌を伊勢の詠作として採っているものは皆無なのである。ということは、『新古今集』以前には、この歌群の歌を伊勢作と認めた勅撰撰者はひとりもいなかったのである。言い換えれば、平安末まで勅撰撰者たちにはこの歌群中に伊勢の詠歌はないと認識されていたわけである。

では、勅撰集以外で、『新古今集』以前の文献にこの歌群の歌を伊勢作として載せているものがあるかと言うと、古いものでは『古今六帖』が②と⑦を伊勢作として載せている。『古今六帖』に見えている歌はこの歌群中に一九首あるが、他の一七首は別人の作と記

〔表Ⅰ〕『伊勢集』巻末歌群（付載秀歌選）の和歌配列と副文献一覧

仙	(初句)	天	御	内	群	西	(副文献)	
①	429	きてみれば	431	430	464	383	379	古今六帖1883(不記), 万代2301(伊勢), 夫木11502(伊勢)
②	430	みくまのム	432	431	465	384	380	新古今1048(伊勢), 古今六帖1888(伊勢), 近代秀歌96(不記)
③	431	思ひいつや	433	432	466	385	381	新古今1408(伊勢), 古今六帖868(不記), 夫木13694(不知)
④	—	おほよとの	—	—	—	386	382	新古今1433(不知), 千五百番歌合2581判(不記), 袋草紙41(不記), 定家物語17(男), 井蛙370(不記), 伊勢物語132(72段, 男)
⑤	—	風吹は	434	433	467	387	383	詞花211(重之), 玄々30(重之), 重之集303, 千五百番歌合2379判(不記)・2471判(重之), 俊成三十六人歌合65(重之), 時代不同歌合225(重之), 三十人撰75(重之), 三十六人撰93(重之), 深窓秘抄73(重之), 百人秀歌46(重之), 百人一首48(重之), 古来風躰550(重之)
⑥	432	おきつ風	435	434	468	388	384	新千載1448(宗子), 万代3270(宗子), 大和物語42(30段, 宗子)
⑦	433	あまふねの	436	435	469	389	385	古今六帖1798(伊勢), 袖中337(伊勢)
⑧	434	いせの海	437	436	470	390	386	後撰744(躬恒), 万葉2983(不記), 古今六帖3289(不記), 夫木16490(不知), 俊成三十六人歌合9(躬恒), 時代不同歌合113(躬恒)
⑨	435	人しれず	438	437	471	391	387	
⑩	—	吹風は	—	—	—	392	388	拾遺集884(不知), 拾遺抄330(不知), 古今六帖1879(不記)
⑪	—	わかせこを	—	—	—	393	389	拾遺集819(赤人), 拾遺抄297(赤人), 万葉1826(不記), 古今六帖3042(赤人紀女郎とも), 夫木1831(赤人), 赤人集127
⑫	—	みちのくは	—	—	—	394	390	古今1088(不知), 古今六帖1801(不記), 奥儀596(不記), 袖中335(不記)
⑬	436	そらのうらの	439	438	472	395	392	夫木11493(伊勢)
⑭	437	芦ひきの	440	439	473	396	391	
⑮	438	津の国の	441	440	474	397	393	
⑯	439	いかてかと	442	441	475	398	394	
⑰	440	あふみのや	443	442	476	399	395	
⑱	441	石清水	444	443	477	400	396	新拾遺920(伊勢)
⑲	442	ありときく	445	444	478	401	397	夫木12061(伊勢)

	仙	(初	句)	天	御	内	群	西	(副	文	献)	
㉔	443	み	まさ	か	や	446	445	479	402	398	古今1083(類歌・不記), 古今六帖848(類歌・不記), 袖中266(類歌・不記)	
㉕	—	山	か	は	に	—	—	—	403	399	拾遺集860(不知), 万葉3390(類歌・不記), 古今六帖3538(不記), 夫木14650(不知), 綺語506(不記), 童蒙412(不記), 袖中661(武蔵防人), 井蛙372(不記), 兼載雑談92(不記)	
㉖	444	山	しろ	の		447	446	480	404	400	新古今1589(字合), 万葉1734(字合), 古今六帖4093(不記), 夫木6063(字合), 定家十体249(字合), 初学206(不記)	
㉗	445	か	た	岡	の	448	447	481	405	401	亭子院歌合48(不記)	
㉘	446	を	ち	へ	行	449	448	482	406	402	古今六帖1533(不記), 実方集301	
㉙	447	は	つ	か	に	も	450	449	483	403	拾遺集976(不知), 古今六帖2890(不記), 夫木11193(伊勢), 初学229(不記)	
㉚	448	さ	ら	し	な	の	451	450	484	404	新古今1257(伊勢)	
㉛	449	し	ほ	の	山	452	451	485	409	405	古今345(不知), 新撰和歌165(不記), 古今六帖2240(不記), 和歌一字1095(不記), 袋草紙756(不記), 初学267(不記)	
㉜	450	音	に	き	く	453	452	486	410	406		
㉝	—	*す	み	よ	し	の	—	—	—	411	407	後撰818(不知)
㉞	451	夕	さ	れ	は	454	453	487	412	408	後撰446(不知)	
㉟	452	忘	れ	な	は	455	454	488	413	411	新古今858(伊勢), 定家十体18(伊勢), 桐火桶212(伊勢), 心敬私語12(伊勢)	
㊱	453	を	と	な	し	の	456	455	489	415	409	金葉二度本505(不知), 金葉三奏本502(不知), 古今六帖1462(不記), 万代1753(伊勢), 綺語196(不記)
㊲	454	*い	は	せ	山	457	456	—	414	410	後撰557(不知), 新勅撰異本歌1377(不知), 古今六帖1460(不記)	
㊳	455	我	恋	は		458	457	490	416	412	新古今1064(伊勢), 秀歌大体104(不記)	
㊴	456	春	日	の	ゝ	459	458	491	417	413	万葉1634(家持), 古今六帖3894(家持), 夫木4573(躬恒他本伊勢), 八雲159(伊勢)	
㊵	457	人	は	い	さ	460	459	492	418	414		
㊶	458	秋	風	の		461	460	493	419	415	万代1781(伊勢)	
㊷	459	さ	を	鹿	も	462	461	494	420	416	万代858(伊勢), 夫木4142(伊勢)	
㊸	460	を	と	は	山	463	462	495	421	417	夫木8239(伊勢)	
㊹	461	難	波	か	た	464	463	496	422	418	万代3245(伊勢), 夫木11966(伊勢)	
㊺	462	い	か	こ	なる	465	464	497	423	419	夫木8958(伊勢)	

仙	(初 句)	天	御	内	群	西	(副 文 献)	
㊥	463	むさしのゝ	466	465	498	424	420	玉葉2294(伊勢), 万代3463(伊勢)
㊦	464	たなゝしの	467	466	499	425	421	夫木15827(伊勢)
㊧	465	いそに出て	468	467	500	426	422	夫木 5209(伊勢), 古今六帖1889(類歌・不記)
㊨	466	*心のみ	469	468	501	427	423	新千載1513(伊勢), 万代2559(伊勢)
㊩	467	音にのみ	470	469	502	428	—	新古今 991(不知), 秀歌大体 100(不記)
㊪	468	岩くゝる	471	470	503	429	424	
㊫	469	いはしらの	472	471	504	430	425	万葉141(有間皇子), 古今六帖2900(有間皇子), 夫木13696(有間皇子), 俊頼 髓脳228(有間皇子), 童蒙 697(有間皇子), 奥儀 272(不記), 袖中 816(有間皇子), 古来風躰34(有間皇子), 和歌色葉369(有間皇子), 竹園 29(有間皇子), 雲葉969(伊勢)
㊬	470	*みよしのゝ	473	472	—	431	426	万代3226(伊勢)
㊭	471	*しら波の	474	473	505	432	427	
㊮	472	かこの島	475	474	506	433	428	拾遺集459(不知)
㊯	473	*難波かた	476	475	—	434	429	新古今 1049(伊勢), 百人秀歌 19(伊勢), 百人一首 19(伊勢), 近代秀歌 74(不記), 詠歌大概 85(不記)
㊰	474	*しら波の	477	476	507	435	430	後撰670(類歌・黒主), 万葉3983(家持)
㊱	475	*おきつもを	478	477	—	436	431	
㊲	—	*かたしきの	—	—	—	437	432	新続古今 427(伊勢), 万代943(伊勢)
㊳	476	み山木の	479	478	508	438	433	新勅撰713(伊勢)
㊴	477	*浦ちかみ	480	479	509	439	434	新千載1102(伊勢)
㊵	478	はちす葉の	481	480	510	440	435	
㊶	479	山川の	482	481	511	441	436	古今479(類歌・貫之), 新勅撰712(伊勢), 貫之集548
㊷	480	夕されは	483	482	512	442	437	新勅撰881(不知), 万葉712(大宅女), 古今六帖 371(大宅郎女), 俊頼 髓脳 131(不記)
㊸	481	山水を	484	483	513	443	438	新古今 1367(不知)
㊹	482	天津風	485	484	514	444	439	夫木5210(伊勢), 小町集107
㊺	483	しるらめや	486	485	515	445	440	
㊻	484	けふありて	487	486	516	446	441	
㊼	—	うつせみの	—	—	—	447	442	千五百番歌合2433判(伊勢), 物語二百番歌合37(空蟬), 風葉1083(空蟬), 源氏物語25(空蟬)
㊽	485	卵の花の	488	487	517	448	443	後撰148(不知), 夫木 2801(家持), 家持集70

すか、あるいは作者名の記載がない。が、これによってただちに②と③の歌は平安中期に伊勢の作として認められていたと見なすわけにはいかない。『古今六帖』の作者名表記はそれほど厳密とは言えないし、いつ付されたものかもわからない。現存する伝本はすべて定家所持本をもとにしていると云われるから、この作者名表記を定家以前の信頼すべき伝えと見るのは大いに問題があるのである。

他に、④の歌を頭昭の『袖中抄』が伊勢作としているのが、『新古今集』以前の伝えとして注目される。が、『袖中抄』の成立は、鎌倉幕府開設の直前、寿永から文治年間の頃と考えられているので、ほとんど定家の時代に等しいと言つてよい。この頃、すでに現存の西本願寺本は成立していたから、この巻末歌群によって伊勢作とした可能性は十分にある。これにより、この歌群中の歌の一部を伊勢作と認めたのは頭昭が最初で、定家がそれに続いたと言つてことができる。

とにかく、『伊勢集』巻末のこの六六首の歌群中には、平安最末期までに伊勢の作と認められていたと見られる歌は一首も存しないということが確認された。実は、このことは早く昭和三十年代のはじめに関根慶子氏と島田良二氏⁽¹⁾によって指摘されていることである。にもかかわらず、この歌群中に存する「難波潟」の歌が、その後『百人一首』や『新古今集』の研究者によってほとんど疑われることなく伊勢歌と認められて今日に至っているのは何故であろうか。

実は、それには理由がある。というのは、この歌は、巻末歌群の他に、『伊勢集』の本体とも言うべき家集の前半部分に重出しているのである。三系統のうち、西本願寺本系を除く二系統の本に重出

して、歌仙家集本系の正保版本(『伊勢Ⅲ』)では一五七番、群書類従本系の伝飛鳥井雅子筆本(『伊勢Ⅱ』)でも同じく一五七番がそれに当たる。歌仙家集本系の古写本である天理図書館蔵本や御所本三十六人集本・内閣文庫蔵本も同様である。おそらくこのために、『難波潟』の歌に関しては、巻末の他人詠の多い歌群中にありながらも伊勢の詠作とみなされているのであろうと考えられる。

ところで、この巻末歌群の中には、『難波潟』の歌と同様に、『伊勢集』の本体部分に重出している歌が、諸本を考え合わせて全部で一〇首存在している。「表Ⅰ」において、初句の肩に*印を付した歌がそれで、②③・④⑤・⑥⑦・⑧⑨・⑩⑪・⑫⑬・⑭⑮・⑯⑰・⑱⑲・⑳㉑・㉒㉓・㉔㉕・㉖㉗・㉘㉙・㉚㉛・㉜㉝・㉞㉟・㊱㊲・㊳㊴・㊵㊶・㊷㊸・㊹㊺・㊻㊼・㊽㊾・㊿の二〇首で

〔表Ⅱ〕 重出歌諸本対照表

	仙	(初句)	天	御	内	群	西
②	261	住吉の	263	263	264	259	260
③	151	岩せやま	153	153	151	150	150
④	90	心のみ	90	90	90	91	—
⑤	156	みよしのゝ	158	158	156	155	—
⑥	—	白波の	—	—	—	156	—
⑦	157	難波かた	159	159	157	157	—
⑧	—	しら波の	—	—	434	—	—
⑨	158	おきつもを	160	160	158	158	—
⑩	509	片敷の	—	—	519	—	—
⑪	—	浦ちかく	—	—	—	154	—

ある。これらの歌の重出箇所を諸本の歌番号で対照して示したのが前ページの「表Ⅱ」である。

・これから、これら一〇首の重出歌を検討して、それらが本来その重出箇所にあるべき歌であるか否か、すなわち、その歌を本当に家集本部分にある伊勢の詠作とみなすことができるか否かを考察してみようと思う。

三

「表Ⅱ」を見てまず気が付くのは、はじめの㉔と㉕の二首を除いて、㉖から㉙までの八首は、いずれも西本願寺本には存在しないということである。この事實は、重出の信憑性を考える上で特に注意すべき点だと思われる。

㉔と㉕の二首は、ともに重出箇所では伊勢の歌ではない。どちらも伊勢と贈答された相手の歌で、㉔は詞書に「おとこのあになりし人」とあつて、藤原時平とおぼしき人、㉕には「人の」とあつて、こちらはその弟の仲平と見られる人の歌である。したがつて、この二首はともと他人詠であるから、基本的に伊勢歌ならざる歌を集めたと考えられる巻末歌群の中にあることに何ら問題はない。むしろ、両歌と贈答関係にある伊勢本人の歌を無視して男の歌だけを採用しているところに、この歌群の選歌方針を窺うことができようと思ふのである。

㉖以下の八首については、重出箇所の前後を、当該歌のない西本願寺本と比較して、和歌の配列関係を検討して行くことにする。

まず㉖の歌は、歌仙家集本系の正保版本では九〇番に重出しているが、その前後それぞれ三首ずつを加えて、『私家集大成』中古Ⅰ

により三系統の本文を掲げてみる。¹³⁾

○歌仙家集本系正保版本（「伊勢Ⅲ」）

式部卿の宮のせんざいあはせに、くさのかう

87草のかう色かはりぬるしら露は心おきてもおもふべき哉

りうたん

88風さむみなく雁がねの声によりうたむ衣をまづやかさまし

89梅の花かにだににへ春たちてふるあは雪と色まがふめり

90心のみ雲ゐのほどもかよひつゝこひこそわたれかさゞぎの橋

㉖

91故郷はたれきかめとや鶯の花よりさきに春をつぐらん

亭子の御門の、をのなるゆきとしがいへの梅の花見におは

しますに

92思ひ出て見にござりせば梅花たれに匂ひの香をうつまし

93せきこゆる道とはなしにちかながら年にさはりて花をみる哉

○群書類従本系伝飛鳥井雅子筆本（「伊勢Ⅱ」）

式部卿の宮の前裁合に、くさのかう

89草のかう色かはりゆく白露は心をきてもおもふべきかな

りうたん

90風さむみ鳴かりがねの声す也うたん衣をまづやかさまし

91心のみ雲井の程もかよひつゝ恋こそまされかさゞぎのはし ㉖

92梅花香にだに匂へ春たちてふるあは雪に色まがふめり

93ふるさとはたれきかめとや鶯の花より後に春を告らん

亭子院の御門の、小野なるゆきよしが家に梅花御らんじに

みゆきせらるゝに

94思いでゝ見にござりせば梅花誰に匂ひのかをうつまし

95 関こゆる道とはなしに近ながら年にさはりて春をみぬかな

○西本願寺本（伊勢一）

式部卿宮の前栽あはせに、草のかう

88 草のかういろかはりぬるしらつゆはこゝろおきてもおもふべき

かな

りむたう

89 かぜさむみなくなるかりのこゑによりうたむころもまづやか

らまし

90 むめのはなかにだにほへはるたちてふるあはゆきにいるまが

ふめり

91 ふるさとはたれきかめとやうぐひすの花よりのちにはるをつぐ

らん

亭子天皇、をのなるゆきよしがいへにむめみにおはしまし

て

92 おもひいでゝみにこざりせばむめのはなたれにほひのかをう

つさまし

93 せきこゆるみちとはなしにちかながらとしにさはりてはるをみ

ぬかな

正保版本の八七番と八八番とは、それぞれ「くさのかう」と「りうたん」とを詠み込んだ物名の歌であり、次の八九番は詞書がないが、これは物名ではなく「梅の花」を詠んだ春の歌である。次に④と同じ「心のみ」の歌があり、そのあとの九一番は「鶯」や「花」を詠んだ春の歌、九二と九三番も詞書と歌句により明らかに春の歌である。

ところが、春の歌には含まれた九〇番の歌は春歌ではない。基本

的には恋の歌であろうが、「かさゝぎの橋」を詠んでいるところは七夕を思わせ、あえて季節を言うなら秋である。八九番から九三番まで春の歌が並ぶ（実はこの後も九五番まで春歌が続く）中でこの「心のみ」の歌だけが異質であると言わざるを得ない。群書類従本系では「心のみ」の歌と「梅の花」の歌が前後入れ替わっているの
で、「心のみ」の歌が物名の歌と春の歌との境目に位置し、少々事情
が変わってくるが、やはりこの歌だけが帰属不明で異質であること
には変わりがない。これに比して西本願寺本では、この「心のみ」
の歌がなくて物名から春の歌へと移行しており、違和感がない。こ
れは西本願寺本が異質な一首を削除した結果とも考えられるが、そ
れよりも、「心のみ」の歌は、本来この部分にあるべき歌ではな
かったのが、何かの事情で卷末歌群の中から混入したものでないか
と思われるのである。

四

次に、④・⑤・⑥・⑦・⑧の五首について検討を加える。やはり
重出箇所の前を三系統それぞれに引用しよう。

○歌仙家集本系正保版本

はらからのなく成たる、恋わたるころ

153 面かげもあひみることになす時は心のみこそしづめられけれ

ながらのはしつくとときよて

154 にはなるながらの橋もつくるなり今は我身を何にたとへん

秋のころ、うたて人の物いひけるに

155 するといへば枕だにせでねし物をちりならぬ名の空に立つら

ん

156 みよしのゝ山のした風さむからしいもせの河も浪たかくみゆ

④

157 難波がたみじかきあしのふしのまもあはでこの世を過してよとや

⑤②

158 おきつもをとらでやゝまむほのく〜と舟でしこともなにゝよりぞ

⑤④

ある大納言の家のひえさかもとに、をととはいふところに、いとおかしくつくりてありけるを見て、やり水のほりなるいはにかきつけゝる、音羽河に滝などおとしたりける

159 音羽河せき入ておとす滝つせに人の心の見えもする哉

人の心かはりけるころ、絵に浪のこえたりけるを見てかきつけたりける

160 まつかけてたのめしことはなけれども浪のこゆるは猶ぞかなしき

○群書類従本系伝飛鳥井雅子筆本

はらからのなくなりたるをこひわたるころ

152 おも影をあひみるかずになす時は心のみこそしづめがたけれあきうたて人のものいふころ

153 しろといへば枕だにせでねしものをちりならぬ名の空にたつらん

154 浦ちかく浪のうちよるさゞれ石の中のおもひと知やしらずや

⑤⑦

155 み吉野の山の下水さむからしいもせの河も浪たかくみゆ

④

156 白浪のうちおどるかすうき島にたてる松だにねこそわぶなれ

157 難波がたみじかき葦のふしのまもあはで此よを過してよとや

⑤②

158 おきつもりとらでやゝまんほのく〜とふなでしこともなにゝよりそは

⑤④

人にしらるべきかぎりしられて、つらく物の有ける比

159 人しれで絶なましかばわびつゝもなき名ぞとだにいまし物を人の心かはりたる比、ゑに松浪こえたる所をみて

160 松かけてたのめしことはなけれども浪のこゆるは猶ぞかなしき

○西本願寺本

はらからのなくなりたるを恋て

152 おもかげをあひみぬかずになすときは心のみこそしづめられ

れ

ながらのはしつくるをきゝて

153 つのくにのながらのはしもつくるなりいまはわがみをなにゝたとへむ

うたて人の物をいひけるに

154 しろといへばまくらだにせでねし物をきりならぬなのそらに立らん

ひとのつらくなるころ

155 ひとしれずたえなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいふべき物を

人

人の心かはりたるころ、ゑになみのこえたるをみてかきつ

156 まつかけてたのめし人もなけれどもなみのこゆるはなをぞかな

歌仙家集本系では、一五六・一五七・一五八に三首連続して卷末歌群中の④・⑤・⑥と同一歌が並んでいる。そして、真ん中の一五七番歌が『百人一首』に採られた「難波濁みじかき葦の」の歌である。

このあたりの配列を見てまず気付くのは、前後の歌は皆一首ずつに詞書が付いているのに、この一五六番から一五八番の三首にだけ詞書が付されていないことである。これは明らかに異様と言えよう。

一五五番歌の前に付けられた「秋のころ、うたて人の物いひけるに」という詞書が一五八番までの四首全体に掛かると見る解釈もあるが、いかがかと思う。一五五番歌の内容から判断して、「うたて人の物いひけるに」とは、関係を持った男との噂をひどく立てられたのでということであって、男が心変わりして女につらく当たるようになったというふうな状況ではないであろう。「難波がた」の歌は恋歌に相違ないが、「みよしのゝ」の歌は名所屏風歌の趣があり、『万代集』もこの歌を雑部に撰入している。また、「おきつもを」の歌は羈旅歌とも考えられる。現行の『百人一首』の注釈書には、「難波がた」の歌がこの詞書を受けると見て疑わぬものが少なくなく、安東次男氏に至っては、「伊勢集の前書によく適^{かな}っている」とまで言っておられるのであるが、とうてい従えない。

群書類従本系では、「しるといへば」と「み吉野の」の間に⑦と同一の「浦ちかく」の歌が、また「み吉野の」と「難波がた」の間に⑧に一致する「白浪の」の歌が入って、「しるといへば」の歌のあとに、卷末歌群中に見える歌が五首並ぶ形になっている。おそらくこ

れは、歌仙家集本系のごとき本文を見て、卷末歌群中にある歌が三首並んでいることに注目した何びとかが、同歌群中の歌をさらに二首増補したものであらうと思う（増補した二首はともに波を詠んだ歌で、両歌の中間に存する「み吉野の」の歌と合わせて三首波の歌が並ぶ。そして五首とも海や水に縁のある歌となっている）。

西本願寺本ではこれら五首の歌が全く存せず、一首ごとに詞書を持つ極めて整然とした形になっている。これが本来の形態であらうと思われる。「しるといへば」の歌の詞書に、他の二系統の本のごとく「秋のころ」というほとんど歌の内容に関わらない語を置いていないのも、これが正しい形であるような気にさせる。したがって、④・⑤・⑥、さらに⑦・⑧と重複する歌は、もともと『伊勢集』の本体部分にあった歌ではなく、後人によって、伊勢歌ならざる歌を集めた卷末歌群の中から何らかの理由で混入あるいは意図的に挿入されたものであったと考えたいのである。

五

残った⑨と⑩は、群書類従本系と西本願寺本系には重出しておらず、歌仙家集本系諸本の内部に重出する本のある歌である。

⑨の「しら浪の」の歌は、歌仙家集本系の中でも少し特異な性格を有する内閣文庫蔵本とその類本にのみ重出している。これも前後を含めて引用する。

○内閣文庫蔵本

かつらにまかりたりける人の、心かわりて侍りければ

41うらうへにおもひやらるゝから衣からにうつりて君かきたれば
山あひに雪ふりかゝりて侍けるをみて

432 足曳の山あひにふれるしら雪はすれる衣の心ちこそすれ

433 しのぶとも君はしらじなみぬ人。のどかに物をおもひなすらん

434 しら波のよする磯まをこぐ舟の梶とるまなくおもほゆる哉 ㊦

まてどもくる事かたき人に、七月七日

434 いむといへばしのぶ物からよもすがらあまの川こそうらやまれ
つれ

○正保版本

からにまかりたりける人の、心かはりて侍ければ

398 うらうへにおもひやらるゝから衣からにうつりて君がきたれば

山あひに雪ふりかゝりて侍けるを見て

399 足引の山あひにふれるしら雪はすれる衣の心ちこそすれ

まてくることかたき人に七月七日

400 いむといへばしのぶ物から夜もすがら天の河こそうらやまれけ
れ

内閣文庫蔵本では、㊦と同一の「しら波の」の歌は、その前の「しのぶとも」の歌とともに、「山あひに雪ふりかゝりて侍けるをみて」と詞書する四三二番「足曳の」の歌のあとに詞書なしで載っている。これを正保版本の配列と比べてみれば明らかのように、一首ずつに詞書を有する歌が前後に並ぶ中で異質である。「しのぶとも」と「しら波の」の二首が「山あひに……」の詞書を受けると解するのも無理である。この二首は内閣文庫蔵本が独自に増補したものである。何らかの事情で混入したものと考えざるを得ないであろう。

「しのぶとも」の歌は、群書類従本系では五〇三番に見えているが、その前後を伝飛鳥井雅子筆本により引用すると、

やまゐに雪のふりかゝりたるを

501 あし引の山にふれる白雪はすれるころもの心ちこそすれ

鏡てうぜさせ侍けるに、うらに鶴のかたをいつけさせて

502 千とせともなにかいのらんうらにすむつるのこゑをぞ見るべかりける

秋のころ月をみて

503 忍ぶとも君はしらじなみぬ人のどかに物をおもひなすらん

504 月影の軒のあまりにさしいりて猶あるころあくがらしつる

とあって、こちらでも一首ずつに詞書を有する歌が並ぶ中で、ただひとつ詞書のない不審な歌になっている。

㊦の「かたしきの」の歌は、内閣文庫蔵本では、巻末歌群が終わった後、末尾に増補されたとおぼしき詞書を持たない四首の歌（五一八〜五二二番）の第二首目（五一九番）に見えている。この歌は

正保版本でも、末尾近くに増補された一群の中に「うらみて物いはい」といひける人に」との詞書を付して載っている。両者を引用してみよう。

○内閣文庫蔵本

518 我こそはにくくもあらめ吾宿の花みにだにも君がきまきぬ

519 かたしきの衣手さむき松風に秋の夕べとしらせずもがな ㊦

520 水の上にあやをりみだる春雨や山のみどりをなべてそむらん

521 山風はふけどふかねどしら波のよするいはねは久しかりけり

○正保版本

うらみて物いはいといひける人に

509 片敷の衣手さむき松風に秋のゆふべとしらせずもがな ㊦

510 水のおもにあやをりみだる春雨や山のみどりをなべて染らん

511 山風はふけどふかねどしら浪のよする岩ねは久しかりける

正保版本の五〇九、五一一番が内閣文庫蔵本の五一九、五二一番に対応する。この「かたしきの」の歌は、歌仙家集本系統ではないが、この本にも巻末歌群に見えない歌であるから、両本とも他系統の本を参照して末尾に増補したものと考えるべきであろうと思う。

おわりに

以上のことから、「難波瀉みじかき葦の」の歌を含めて、『伊勢集』の巻末歌群と家集本部分との重出歌一〇首は、他人詠である二首を除く八首すべてが、何らかの事情で混入しないしは意図的に挿入された歌であって、本来家集本部分にあるべき歌ではない可能性が大であることが判明した。したがって、これらの歌が伊勢作であることは極めて疑わしいと言わねばならないのである。

なお、家集本部分にこれら八首の重出歌を全く持たない西本願寺本のような形を原形に近いと見る考えに対して、そうではなく、それらが重出歌であるゆえに西本願寺本は贈答関係のない八首の歌をすべて削除したのだとの見方も成り立ち得ると思われる。が、そう考えた場合、いくつかの疑問が生じる。

ひとつには、西本願寺本には、家集本部分の内部で重出する歌が他に何首も存在することである。たとえば、三四四番と三五九番、二九三番と三七六番、一五三番と四五二番、三〇四番と四五六番などがそれに当たる。これらの重出はそのままにしておいて、巻末歌群との間の重出歌のみ削除したと考えるのはいかに不自然である。

また、重出歌の一方を削除する場合は、後出する方を削るのが普通ではあるまいか。この場合は家集本部分の歌よりも巻末歌群の歌の方を除くのが自然であると思う。現に、巻末歌群中の重出歌を

削除している本がある。内閣文庫蔵本がそれで、歌仙家集本系において家集本部分との間に重出関係がある③・④・⑤・⑥・⑦の五首のうち、⑤を除く四首は巻末歌群中に存在しない(表一)参照)。すなわち、一五一・一五六・一五七・一五八番という近接した四首(正保版本の歌番号もこれに一致する)について、後の重出部分を削除したと考えられるのである。⑧(九〇番歌)については、これら四首と離れた位置にあるので見落としたのであろう。

というわけで、『百人一首』の「難波瀉みじかき葦の」の歌は、『伊勢集』では本来巻末に付載された秀歌選の中にのみ存した歌と見られるのであり、それが伊勢の詠作である可能性は甚だ小さいのである。

もちろん、巻末歌群に伊勢作の歌が皆無であるという証拠はないので、この歌が絶対に伊勢作ではないと断言はできない。とは言え、頗る付きに疑わしいのだということは心得ておかねばならない。「難波瀉」の歌を、まさに大歌人伊勢の面目躍如たる素晴らしい秀歌だと讃えてみても、地下の伊勢は案外、「あら、それは私の歌じゃないのに」と苦笑しているかも知れないからである。

なお、『伊勢集』の巻末歌群に関する諸問題については別稿があるので、併せ参照願えれば幸いである。また、『伊勢集』全体の構造については、改めて論じる用意がある。大方の御批正をお願いする次第である。

〔注〕

(1) 引用は、樋口芳麻呂氏校注、岩波文庫『王朝秀歌選』(昭五八 岩波書店)に拠る。

(2) 引用は、峯村文人氏校注、日本古典文学全集26『新古今和歌集』（昭四九 小学館）に拠る。

(3) 注1掲出書の脚注。

(4) 『新編国歌大観』第一卷（昭五八 角川書店）解題（田中裕・長谷完治両氏執筆）に拠る。

(5) 歌仙家集本系（『伊勢Ⅲ』四六九番）にのみ、一首だけ「是はありまのわうしのつみせられける時よめる」という詞書を付した歌が存在するが、これは内容から見て、本来の詞書ではなく、後人が施した注記と考えられる。

(6) 天理図書館善本叢書と書之部4『平安諸家集』（昭四七 八木書店）に影印。歌番号は私に付したものによる。

(7) 『御所本三十六人集』（昭四五 新典社）に複製。歌番号は私に付したものによる。

(8) 島田良二氏著『古今集とその周辺』（昭六二 笠間書院）に翻刻。歌番号も同書による。

(9) 『日本古典文学大辞典』第二卷（昭五九 岩波書店）の「古今和歌六帖」の項（平井卓郎氏執筆）。

(10) 「伊勢集の三系統をめぐる考察」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第六卷（昭三〇・三二）。

(11) 「伊勢集の諸本とその系統」『私家集研究』第二輯（昭三〇・一一）。

(12) 関根慶子氏は、近著『平安文学 人と作品とところどころ』（昭六三 風間書房）においても、「研究余滴・伊勢作か否か、疑問の二首をめぐって」と題する文章中で、『源氏物語』空蟬卷の歌(65)とともに「難波瀉」の歌を伊勢作とすることに疑問

がある旨、改めて説いておられる。

(13) 引用に際しては、濁点を付し、上の句と下の句の間をつめ、集付と改丁符号を省いた。以下同じ。

(14) 新潮文庫『百人一首』（昭五一 新潮社）。

(15) 注8掲出書の翻刻本文に拠る。私に濁点を付し、上の句と下の句の間をつめ、集付と改丁符号を省いた。以下同じ。

(16) 拙稿『伊勢集』に付載されたる秀歌選をめぐって」稲賀敬二先生編著『源氏物語の内と外』（昭六二 風間書房）所収。

(17) 拙稿『伊勢集』構造論・序説（上）（下）『大分大学教育学部研究紀要』第一一巻第一号（平一・三）・同第二号（平一・一〇）掲載予定。

（平成元年三月稿）

〔付記〕本稿は、昭和六三年度広島大学国語国文学会秋季研究集会（昭和六三年一月二六日〜二七日）において同題で口頭発表した内容を成稿としたものである。席上、貴重な御助言を賜った稲賀敬二先生には、記して厚く御礼申し上げます。

——大分大学教育学部講師——